

創立 144 周年記念式典 院長式辞

理事長・院長 湯口 隆司

活水学院はエリザベス・ラッセル先生とジェニー・ギール先生のお二人が米国から長崎に着き、一人の成人女性を生徒に迎え始めた学校です。今年はその 144 周年目に当たります。記念式典には同窓会、大学父母会、中高 PTA、それぞれの会長様はじめ、役員の方々のご列席を賜り心から感謝申し上げます。また先ほどの中高吹奏楽部の演奏は永眠者の地上での生活への感謝と大きな愛で見守りそして永遠の喜びの中で受け取られた神さまを賛美する真に心に響く演奏でした。天に在る永眠された卒業生にも届く心のこもった演奏でした。ありがとうございました。

この創立記念の日にラッセル先生とギール先生が日本に派遣された経緯と背景を皆さんと顧みることは学院建学の精神を探るよい機会です。ここで「建学の精神」というのは一般的な理念というレベルの精神ではなく、建学に込められた「心」についてであり、そのことをお話したいと思います。今年にはギール先生が創立された福岡女学院で話す機会がありました。お二人の宣教師と派遣をした宣教団体を詳しく調べましたので、感じたこと含めお話しようと思います。

この二人の活水創設者を送り出した団体は米国の婦人海外伝道協会 (WFMS) といい、当初はインドに女性宣教師を派遣するために、1869 年 5 月にボストン在住の数名の婦人たちが意気投合し、周囲の婦人たちを勧誘し会員を募り始めた団体です。

さて米国でこの婦人海外伝道協会が立ち上げられたのはラッセル先生たちが長崎にくる 10 年前のことです。この婦人伝道団体の特徴は小さなグループ (Conference) が種となり、次に地域組織 (Auxiliary Society)、それが成長して支部 (Branch) を結成し、全国規模の組織となる、草の根の運動であることです。これはメソジスト運動の発祥の地である英国の教会成長と同じ様態です。上からの指示と計画、資金でなく純粋に婦人の気持ちが集結してできた協会です。協会とは教会 (Church) でなく任意団体の団体 (Society) という組織です。婦人海外伝道協会の年会費は一人 1 ドルです。各地区は 10 ドルを支払うことが会則で決められていました。また団体の会報誌「異教徒婦人之友」"Heathen Woman's Friend" を最初の年度から手作り編集し会員に配っています。その組織力に当時の米国女性の宣教へのエネルギーを感じます。

婦人海外伝道協会の中でラッセル女史はシンシナッティ支部、ギール女史はニューヨーク支部が直接個別に候補者として二人と面接し、理事会に推薦したのです。派遣される宣教師は支部からの献金で派遣先の生活費一般が支給されました。どちらの支部も 500 人から 1000 人程度の支援者でした。ラッセル女史は年報 600 ドル、雑費 150 ドル、同じ支給額がギール女史にもニューヨーク支部が支弁しました。ですから二人は支援してくれる米国の支援者、特に支部の支援者に感謝の祈りと原稿で長崎での仕事、学校生活を報告しました。

また今回資料を見て驚いたのは、宣教師を希望する申込者に対する支部における面接内容です。

伝道団体の内規 (By-laws) にそれは書いてあります。その定型の質問内容は、健康や言語能力については当然ですが、宣教が神への召命、すなわち自分の意思でなく、あくまでも神による召しがあったかどうかの証言が求められています。

例えば一問目は「宣教師の働きが聖霊による内なる動機がなされたことを信じますか」、「イエス・キリストの贖いによる救いの体験と知識を持っていますか」、「魂の救いを真摯に求めますか。またこれまでに求めたことが明白にありますか」という質問が続きます。派遣年齢は原則 22 歳から 30 歳までと決められていました。

当時ラッセル先生は 43 歳、ギール先生は 33 歳でした。本来は候補者にも漏れるはずですが、しかしこの 2 人は米国での教員経験があったこと、特にラッセル先生は長い教員生活が配慮されたと思います。ラッセル先生の 43 歳という年齢は当時の米国女性の平均寿命と数年しかちがわない年齢に達してました。異例中の異例の決定です。ラッセル先生の名前が理事会議事録の派遣者決定リストの最後に記されていることは、内部での議論があったことを物語っていると私は感じます。

派遣は独身女性に限られました。質問項目には「結婚したことはありますか。夫だった人は生きておられますか」といった質問もあります。そして正直なことを述べましたという「宣誓」が求められました。この面接から私たちは、神への信頼と宣教師として彼女たちに予想される任地先の様々な困難を思い浮かべることができます。

理事会記録を見ると派遣先の国で亡くなった宣教師婦人らの記録もありました。特にインド、中国は日本に比べリスクはとて高かったのです。宣教団体が若い独身者であることを定めた理由は経済的負担だけでなくいくつものリスクを仮定していたのでしょうか。私たちはアフガニスタンで灌漑用水の整備に尽くししかし銃で撃たれなくなったペシャワール会中村哲医師を思い出します。明治時代の長崎はそこまで危険ではなかったでしょうが、同じ婦人海外伝道協会から送られた青山女学院の女性宣教師が東北で石を路上で投げられ片目を失明した時代だったのです。

当時の宣教師はたえず自分の病気や暴行の可能性のなかで生徒、あるいは孤児となった子どもに向き合う毎日でした。そのような生活を思う時に、現在の私たちはそんな時代で生きていなくてよかったと思います。2 人の女性宣教師がそこまでして長崎に来た理由は「なにか」に思いを馳せる必要があるでしょう。

中村医師は現地の飲む水、農業に欠かせない水を通して住民への奉仕をおこないました。一方、ラッセル・ギールの両先生は教育をとおして「いのちの水」の存在を指そうとされたのです。そのことを学校の名称にまでしました。ではその「いのちの水」とは「なに」なのでしょうか。

イエスがサマリアの女に「水を飲ませてください」と言ったとき、サマリアの女はあなたは「くむ物」をもっていないと拒否しました。今、その地でイスラエルとハマスのとの戦闘

が行われているまさにその地域近くでの 2000 年前の出来事です。

「いのちの水」の象徴は身近にあります。卒業式の手桶です。中高も大学も卒業式で、卒業生がリボンを結んだ手桶を下級生に手渡しをします。水の入っていない手桶です。今年度亡くられた同窓会の卒業生の方々もふくめ、私たちは代々渡される手桶が空っぽである理由を知っています。それは中身の無い空虚な手桶ではありません。

手桶はためておくためでなく、すくった水を他のものに注ぐための器です。手桶を次の学年に次の世代に渡して行く時、手桶を持たない人に喜んで水を飲んでもらいたい、喜んで水を分かち合いたいという心が満ちた手桶です。そして心からそれを信じる生徒学生になってほしいという代々に渡る儀礼です。また入学式、そして卒業式に必ず歌う 404 番「あまつましみず」の中にも「いのちの水」の本質が謳われています。最後の節で「そそげ、いのちのましみずを」と私たちは歌います。神さまから恵みとして私たちが受けた「いのちの水」を、今度は隣人に注ぐ、すなわち分かち合うことが「いのちの水」であり、私たちの神さまへの応答なのです。

卒業生は水を注ぎました。在校生に渡す手桶は水がない空の手桶になっているのはそのためです。この手桶には「建学のころ」が充満しているのです。

米国の女性宣教師、さらにはそれを支えた多くの女性支援者の切なる思いは、飲む水だけではなく、技術、知識、文化、さらにはお金の独り占めでなく、隣人と共に生きるとことの深い意味、それは神の平和と愛を知るきっかけとなる真実を、生徒学生、教職員が知ることでした。現在、婦人海外伝道協会はその後「メソジスト・ウーマン (Methodist Women)」と名称を変え、長きに渡りその名称を使用してきましたが、数年前には「United Women In Faith」と変更し、米国で最も大きな女性団体となり活発な活動を国内外で展開をしています。

分かち合う行為の先には大きな希望があります。それは水を注ぐこと、分かち合うことは、無くなることでない。逆に社会と世界への貢献できる行為となることです。自立し一人の女性として自分らしい生き方ができる女性になることの土台です。この願いと祈りの心は「いのちの水」が充満している手桶に込められています。

そのことこそラッセル・ギールの二人の女性宣教師が 144 年前に長崎に赴き、教育を通して示そうとした、最大の精神、心であったと私は思います。

私たちは 144 年前と同じように、この時にもその願いと祈り、希望が現に存在するものとして生徒学生教職員の区別なく「いのちの水」を、実体として喉の渇きをもつていただき、活かしていかねばなりません。自分ではできなくとも、主なる神さまがそれを可能にしてください。感謝の祈りを捧げます。

(祈り)